

木枯らし1号がやって来ました。

あの熱かった夏がウソのようで、突然季節が変わったように感じられます。神戸地区としての大きな協力によって、夏休みを利用して行われた“ふっこうのかけ橋 2013”も終了から早や3ヶ月が経ちました。お蔭さまで福島から来られた親子さん達は、たくさんの楽しい思い出を、福島で待つ家族への「お土産」としてカバンに詰め込んで帰られました。昨年からはまったこのプロジェクトを通して、福島の抱える今と私たちの在り方をこれからも問い続けていきたいと思ひます。幸いにも地区広報誌の「つながり」編集部から、毎号、このことのために1ページを頂きました。神戸が受けたように、長い支援の継続を目指して、福島からの「生」の声をお届けしたいと思ひます。



上の文章は2013年12月1日に初めて「ふくしま通信」としてプロジェクトの取り組みを紹介・報告するために書かれた第1号の書き出しです。

東日本大震災から丸8年、2012年に小教区の教会学校リーダーや有志で立ち上げられた“ふっこうのかけ橋”プロジェクトも今年の夏、無事8回目を終了しました。今は夏の喧噪から爽やかな秋を通過し、来年度の取り組みに向けての話し合いが始まっています。

神戸から出来る福島支援として神戸地区主催のもとに始まった保養目的のプロジェクトを広く小教区の皆さんにお伝えしようと広報紙“つながり”の紙面にページを頂き、紹介や報告を続けて来ましたが、先般、文字での呼びかけや報告には限界があるのではないかとのご意見を頂きました。活字ばなれのせいかとも思ひましたが、理由はそうではなく、小教区の方々の“ふっこう”の認知度がそう高くはないと思へること。また毎回同じ人が関わっていることから、支援者に広がりが見えないことなどが挙げられ、文章による紹介や報告だけに留まっているからではないかといったご指摘でした。

毎回、紙面に報告させて頂いていることや実行委員からの小教区へのアナウンス、また実行委員が出ていない小教区へは窓口担当をお願いしてアナウンスに努めてきたつもりでしたが、至らなかつたようです。

支援の方法もいろいろあり、このプログラムだけに限ったわけではありませんが、私たちに出来る方法がこの保養プログラムでした。

2011年以降、次々に起こる災害や事件、また最近ではオリンピックに向けての世界選手権やラグビーワールドカップ、天皇の即位に伴う数々の行事、香港の民主化運動など、報道が過熱し目まぐるしく変化する社会状況の中では、福島で起こったことも過去のこととされがちですが、福島の問題は終わった訳ではありません。

せん。

現状は排出され続ける冷却水や民家の軒先に現場保管されている除染土の行き先等、何も決まっておらず、人々はそのような環境の中で暮らさざるを得ない状態が続いています。

今回のキャンプに参加したある小学生が昼食時にポツリと呟いた一言をリーダーがキャッチしていました。彼は年齢に見合わず、バジルソースのスパゲッティが大好きで、おじいちゃんに教わってバジルを育てていると話していました。そこまでは、なかなか幼いのに大人の味覚を持っているんだなあと感心するくらいで終わるのですが、そのあとの一言にリーダーは驚いたと話してくれました。「でも、バジルは外には出さないで、家の中で育てているんだ」と。これは一体何を意味しているのでしょうか。このことは福島に暮らし続ける人々だけの地域的な問題ではなく、私たち一人ひとりの問題であり、その生き方の転換を迫られる問題でもあるのではないのでしょうか？



共に暮らす家を大切に（ラウダート・シ）するためにも、また負の財産を未来の人達に残さないためにも、こども達の成長を見守りながら寄り添うことが出来るように努めたいと思ひています。

そう言えば、神戸マラソンが開催された日曜日、一人の青年が母親と共に神戸中央教会のミサに参加していました。ミサ後、彼は2012年の“ふっこうに”に参加していた少年で、この春から関西の大学に通うことになったとにこやかに話し、父親が神戸マラソンに参加するので応援のために来神したとのことでした。応援の合間を縫って挨拶に立ち寄られ、爽やかな笑顔を残して応援の場に戻って行きました。